幼児の砂遊びを見ていたら、砂の山をもり上げて、その上にしゃべるを二つ合わせて立てて、倒れないように砂でかためている。砂を手のひらでたたいたり、握ったり、みぞをつくったりしている。何かなと思ってみていると、そのしゃべるを両手で持って、空中にさし上げ、ドッキングしますといって走らせる。それは月へいく宇宙船の基地であった。宇宙時代は幼児の砂場にも反映している。ところがしばらくするうちに、しゃべるは起重機になって砂を運ぶ機械になった。宇宙船も起重機も同じしゃべるである。この同じしゃべるが、むかしは大砲に使われたこともあろうし、もっと他のことにも使われたであろう。

しかし、砂をかためたり、たたいたり、溝を掘ったり、水を流したりということは、いまもむかしも変わりなくやられていたことであり、それこそが砂あそびの本質である。宇宙船になったり大砲になったりするのは、手でたたいたり掘ったりかためたりするためのいわば材料になっているにすぎない。

幼児の遊びを見るにつけても、幼児は何でもを自分の遊びの中にとりいれていく力におどろく。時代の話題をちゃんととりいれながら、幼児の発達が必要としている砂いじりに余念がない。おそらく、こうしてずっと昔から子どもはどろをこね、砂をいじりながら、人間として必要な能力（そこには運動能力もあるし、知的能力もあるし触覚という原始的な感覚器官を通して感情の教育もふくまれている）を作り上げてきたのであろう。

それにしても、近ごろの幼児は、幼稚園で砂いじりをやらなければ、家の近くでは泥や砂をこねることもできないことが多くなってしまった。道路はコンクリートと自動車、家の中には家畜もいないし、周囲には木の緑もない。一本の自動車道路が富士山の自然を破壊してしまうように、文明は幼児らしい生活を奪い、人間をだめにしてしまうことはないだろうか。幼稚園は、幼児のあそびの生活を確保することによほどいっしょうけんめいにならなければたいへんな時代なのだ。

幼児の教育　第六十九巻　第二号

二月号　©　定価八〇円

昭和四十五年一月二十五日　印刷
昭和四十五年二月　一　日　発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

101 東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座　東京　一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします